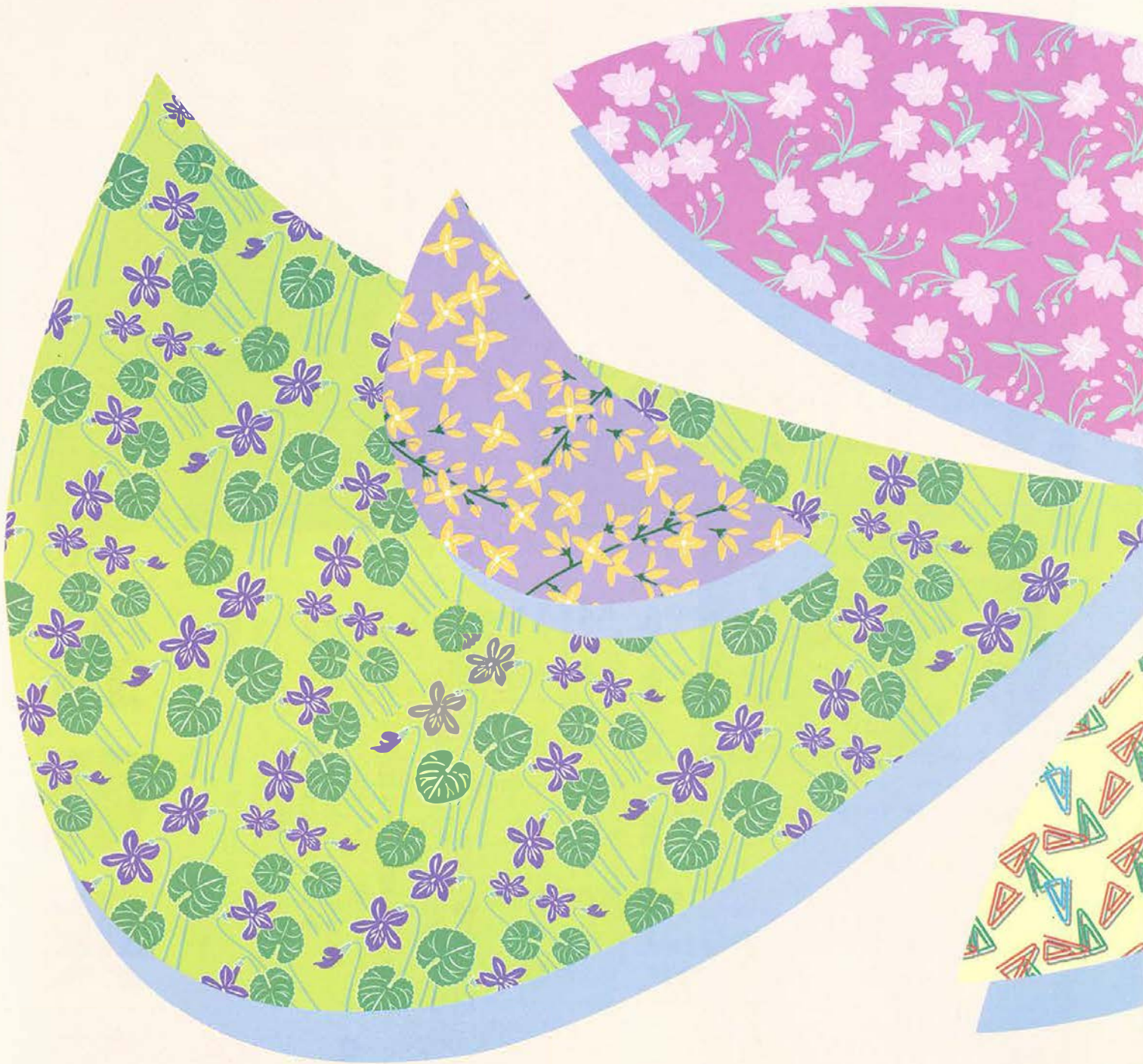


ともに担い、ともに築く、^{ひと}女と^{ひと}男の情報誌

わんぱく

NO.34

特集 歩きはじめたNPO



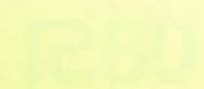


Contents

特集

歩きはじめたNPO

提言	7
市民社会のなかのNPO② 市民活動とNPO法	
都留文科大学助教授 中村陽一	
取材	4
傷ついた心と命を救う	
フェミニストカウンセリング・神戸代表 執行照子さん	
ウイメンズネット・こうべ代表 正井礼子さん	
静岡県のNPO 法人化を選ぶ／選ばない?	6
まちづくりの仕掛屋	
グランドワーク三島事務局長 渡辺豊博さん	
「あったらいいな」をかたちに	
ぐるーぷ・みるめ代表 馬場利子さん	
ヒント	10
きっかけはいっぱい	
～あなたとNPOのステキな関係～	
イラスト	4～13
NPO法人化への道～N子さんがんばる!	
ひと	3
種まく人	
舞踊家 佐藤典子さん	
トピックス	12
自然を学ぶ～子育てはため息まじりの黄金時代	
静岡自然を学ぶ会代表 池上理恵さん	
コラム	14
本の紹介	
用語解説	
読者の声	
編集後記	



種まく人

プロフィール

佐藤典子（さとうのりこ）

終戦直後、浜松で日本の現代舞踊の創設者の一人、石井小浪先生と出会い現代舞踊の道へ。東京での内弟子生活を経て石井小浪舞踊団でプロとして踊ることに。浜松・磐田への帰郷を待ちわびる生徒が増えたことから、1950年佐藤典子舞踊研究所を開設。舞踊教育と創作活動に入る。86年県西部に同門会17教室による佐藤典子同門会が発足。現在、(財)静岡県舞台芸術センター理事・県現代舞踊協会副会長・磐田市文化協会会長などを務める。



舞踊家



現在のレッスン風景

佐藤典子さん

心を「身体表現」に置き換えて

心と身体からだの解放を謳うたって誕生した現代舞踊100年の歴史は、正に女性史とオーバーラップする芸術活動といえる。

自らの心を身体表現という「自分の言葉」に置き換えて伝える。それは人と人との心の会話である。演ずる者と、そこに会おう人と、不変の感性を通して凝縮した時間と感動を共有し、人間として生きていくことを確認しよう…。

人類と共に古い舞踊を新しい芸術として語るるとき、そこに至る歴史・文化・自然などを無視して考えることは出来ない。千年の時輝く磐田の地に、本物の舞踊芸術の種を蒔いておけば、やがて本物の花が咲く筈、そして舞台芸術を志す人々が生き生きと活動出来る環境をつくりあげたいと願っている。

佐藤 典子



舞台作品「朱鷺」



石川小浪舞踊団での佐藤さん

特集

歩きはじめたNPO

取材1

傷ついた心と命を救う

～あれから4年・・・今、NPOを考える

ウィメンズネット・こうべ

フェミニストカウンセリング・神戸

NPOの活動にはさまざまなものがある。今号では、阪神・淡路大震災という惨事の前後を通して女性の声を聴き続けているNPOを訪ねた。

ウィメンズネット・こうべ

「ウィメンズネット・こうべ」は、震災前から女性問題に関する電話相談を中心に講座の開催、情報誌の作成、「女たちの家」の運営を行っている。

「女たちの家」はDV（ドメスティック・バイオレンス）の被害にあった女性や孤独感を持った女性などが元気になるスペースとして須磨区に作られた。

震災の発生

1995年1月17日震災の発生により被災した多くの人々が避難所生活を強いられた。「女たちの家」も震災で大きな被害を受け、「ウィメンズネット・こうべ」のメンバーも多くが被災した。しかし、震災直後の2月には「女性支援ネットワーク」をつくり、洗濯機20台を避難所へ送るなどのボランティア活動を行っている。

また、震災という不安な状況の中で心に傷を負った女性たちは、拠り所にできる相談場所がないなか、人づてに知ったメンバーの自宅に相談の電話を寄せることも多かった。この叫びを受けて3月には「女たちの家」と女



性のための電話相談を再開した。

現在は、週一回の電話相談以外に、DVのサバイヴァーのための自助グループや講座を行っている。DVにあった女性は、「暴力を受けるのは自分が怒らせるようなことをしたからだ。自分が悪いのだからしょうがない」などと自分を軽んじてしまうなど女性特有の問題を抱えることがある。この問題からの脱却をめざすために「DV学習会」を開き、自己尊重感を高めるワークショップなどをおし女性たちの信頼を得ている。また隔月発行の通信では阪神間の情報や草の根の情報を発信し続けている。

フェミニストカウンセリング・神戸

女性たちの電話相談は、パート・アルバイトの不当解雇、性暴力、幼児虐待、DVなど多岐にわたっている。震災後は混乱・不安などからDVの相談が増えたということである。

相談を受け続けるうちに、相談を寄せる女性たちに逃げ場を提供するだけでなく、心を支える必要があることを実感した。メンバーのうちの数人が中心になり、98年5月に新たに「フェミニストカウンセリング・神戸」を発足させた。面接相談（要予約）を中心に、女性のための講座「自己尊重トレーニング」や「自己主張トレーニング」などを行っており、多くの女性の精神的サポートの機能を果たしている。

※サバイヴァー（survivor）生存者
虐待や暴力に対し、自分を守り癒すことができる人。「犠牲者」と区別して使われている。

ウイメンズネット・こうべ
代表 正井礼子さん
女性がかかえる問題を共に解決
していくための学習会、講演会を主
催。他に環境問題、女性の自立や
政治参画についてなど広範囲にわ
たる内容の情報誌の発行を行って
いる。また、1996年には震災の残
した傷跡を女性の声で綴った「女
たちが語る阪神大震災」を出版し
た。
(連絡先 078-360-6202 金曜日に
限る。他は留守番電話)



フェミニストカウンセリング・神戸
代表 執行照子さん
(写真は取材に応じてくださった三
谷真希子さん)
メンバー8人が30万円ずつ出し合
いNPOを組織し、事務所を構える。
面接相談のほか、「からだを知る
講座」・「自分発見講座」などの女性
のための各種講座や「自己尊重ト
レーニング」・「サポートグループ」など
グループワークも主催している。
(連絡先 078-360-6211 金曜日を
除く)

活動の可能性 ～NPO法人

「ウイメンズネット・こうべ」では、新し
い活動として、女性たちが駆け込むことの
できる医療や心のケアが揃ったシェルターをつ
くるための活動をしている。既に、実現の方
向に進んでいるが、建物を保有(法人名義に
したい)すること、多くの資金が必要(寄付
等)なため、このシェルター部門だけはNP
O法人にすることを考えている。全国にもそ
の動きは広がっているようだ。

しかし、「フェミニストカウンセリング・
神戸」・「ウイメンズネット・こうべ」とも、
組織全体は法人化しない予定だ。NPOを法
人化することによって必要になる税金等の費
用も活動に回したいと考えているからだ。

活動の未来

「ウイメンズネット・こうべ」は企業から
の援助はないが、震災後の助成金を活用して、
救いを求める女性の助けになる連絡先を記し
た本を出すなど財源確保の工夫をしている。
また、「フェミニストカウンセリング・神戸」
は、行政に相談先を探す問合せがあった時に
紹介してもらっている。行政からも企業から
も支援を受けながら、独立して自主的に活動
していくことが理想だという。事業の専門性
を行政や企業にもっと評価してもらいたい。

ボランティアにも限界があり、いいことをし
ているという意識だけでは活動の継続は難し
い。お金・人・場所が必要だと訴える。

現在、事務所を週1回「ウイメンズネッ
ト・こうべ」に貸していることもお互いの資
金的な協力にもなっている。また、これは講
座や面接相談の収入と共にNPOとしての
「フェミニストカウンセリング・神戸」の貴
重な財源になっている。

組織運営の面では「ウイメンズネット・こ
うべ」とはこれまでのようにゆるやかな連携
を保ちたい。「ウイメンズネット・こうべ」
では、出会いや発見を通していろいろな人が
自分の力を伸ばし、輝いている。一人ひとり
が生き生きすることは、この団体を、そして
神戸を生き生きさせるのではないかと心の面
まで復興することを願い活動を続けている。

人のために活動するこうしたNPOの姿
は、自分のことだけで精一杯だった震災後の
神戸には一点の灯火に思えたことだろう。今
回訪ねた二つの団体には苦難を乗り越え、女
性の声にずっと耳を傾け続けてきたからこそ
持つことのできる情熱があった。その情熱こ
そがNPO(法人化しないものを含めて)の
目的達成への強い思いになるのだろう。そし
て自立したメンバーがゆるやかな絆で結ばれ
ていることがメンバーの活力にも組織の力に
もなっているのだと感じられた。

